

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

民族文化の再構築と観光産業： 横山報告とアルチュノフ報告に対するコメント

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 勝彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001729

民族文化の再構築と観光産業 横山報告とアルチュノフ報告に対するコメント

村上 勝彦

私は日本経済史、あるいは日本と中国の経済関係史を研究する者であり、経済学的関心に重点をおいて2つの報告に対するコメントを行いたい。2報告の共通点を強いて挙げれば、アルチュノフ先生が最後に触れた観光産業にあるかと思われるが、しかしそこから共通の問題を探し出すことは私にとって困難なので、各報告ごとにまとめと疑問点の提示を行いたい。

横山報告に対して

今回のシンポジウムのテーマは「民族の文化と政治経済学」であり、とくに後者の「政治経済学」というテーマを考えれば、観光産業を正面から取り上げた横山報告は極めて適切なものであると思われる。そして報告では観光人類学にとって大変興味深い事例がスライド・ビデオ等を含めて紹介され、その中で重要な問題提起がされている。長期にわたる現地滞在と調査をへての報告であり結論なので我々にとって持つ意味は大きい。しかも取り上げられた地域はペー（白）族居住地域の大理であり、それは中国雲南省の中でもサニ（撒尼）族の石林やタイ（傣）族のシーサンパンナ（西双版纳）やナシ（納西）族の麗江等と並ぶ観光の最重点地域であるから、報告は重要かつ貴重なものである¹⁾。

観光産業の担い手と生み出された文化との関連

観光人類学にとって、一般的には以下の3つの側面が論点になるかと思われる。まず第1は観光を生み出す仕掛け人、あるいは担い手は誰かという問題、第2は観光がホスト社会、この場合は白族社会に与える影響という問題、そして第3は観光を通じて生み出される文化の中味、質という問題である。報告では、絞り藍染めと三道茶という2つの観光産業化した商品がかなり対極的に位置づけられている。つまり第1の論点である商品化の仕掛け人は絞り藍染めでは白族農民であるのに対し、三道茶では漢族、あるいは白族であっても農村外の人々という対比によって捉えられている。そしてこの点が第3の論点、観光を通じて生み出される文化の質という問題に関連して、前者がペー族の生活にフィードバックする文化、後者が観光のために（のみ）商品化する文化であるという対比で捉えられているように思われる。

そこで私の第1の疑問は、この仕掛け人あるいは最初の担い手という問題と生み出された文化の質という問題をこのように直結させて考えて良いのかどうかという問題であ

る。さらに関連して、やや抽象的になるが、そのように直結すると考えた場合、直結させる根拠は何かという問題である。

観光産業のペー族社会に与える影響

第2の問題は、ホスト社会に与える影響の問題である。報告では伝統的文化の破壊あるいはそれを損なうというふうに単純化出来ないとされ、また自然環境の破壊等についても単純に結論づけられないと慎重な態度を取っている。むしろ強調されている点は、観光商品化が伝統文化の再発見あるいは洗練化された形での再構成を通じて民族的アイデンティティの重要な契機となる場合があると積極的に捉えている点である。もちろんこのことは先ほど述べた生み出された文化の質によってももちろん異なることだとは思われるが、ここで私はホスト社会に与える影響について、報告では文化変化の動態に関して主に取り上げているが、同時に社会変化の動態、社会変化に及ぼす影響はどうかという点について疑問を提起したい。

まず観光人類学にとって第1の論点である担い手や仕掛け人についてだが、観光商品化が大規模化してくれば担い手は農民一般ではなくなり、その中で成功する人や機転が利く人達が生み出され、ひいてはその社会内部において一定の階層的分化やあるいは旧来の農村秩序やヒエラルキーに対する変動が生み出され、それが民族的アイデンティティに影響を与えるのではないかという問題である。つまり、伝統文化の再編、文化変化の動態に止まらず社会変化の動態を引き起こし、その社会変化の動態がまた文化変化の動態に反作用を及ぼす場合もあるのではないかということである。輸出商品化したり大規模生産化した絞り藍染めの場合はどうなのか？スライドで見た限りは大した規模ではない様だが、それが非常に大規模化した場合どうなのだろうか？ペー族に止まらずさらに敷衍して他の少数民族における観光産業化を考えた場合、どうなのだろうか？

観光産業とジェンダー問題

第3の問題は、今までとやや異なったジェンダーの問題である。絞り藍染めの生産や販売において女性の役割が増大し、女性の経済力の増大によって旧来のペー族社会の構造が変化することがないのかどうかという問題である。例えば石林のサニ族において非常に重要な土産品である刺繍の肩掛けカバン等の生産あるいは販売において女性の役割が大きく、その女性のもつ社会的地位などが変化する場合があるかも知れないと聞いている。女性の社会的地位の変化がその民族社会に影響を与え、民族社会が変化を蒙るのか否かという問題である。ペー族の場合はどうなのだろうか。

観光産業化に際し選択された伝統文化の要素

第4の問題は、第1の問題とも関連することだが、多くの伝統文化の要素のうち観光産業化に際して選択されたものは何であり、それが民族的アイデンティティにおいて占める位置はどの様なものであるのかという問題である。逆に選択されなかったものは何であり、選択・非選択の分岐は伝統文化の再編にとってどのような意味を持つのかという問題である。広西チワン族自治区のチワン（壮）族の祭りにおいては宗教的側面などが見られたが（塚田 2001）、そのような宗教的要素も含めて選択されたものが民族的アイデンティティの中でどの様な位置を占めるのかという問題である。

商品経済化と民族文化

最後の問題として、かなり抽象的なことだが、報告では「民族文化の変化の動態化」において商品経済の果たす積極的な意義、すなわち自給自足的で閉鎖的な共同体内で伝統文化が保持されるのではなく、商品経済すなわち他の共同体や民族等との分業関係に入り込む中で民族文化が再構築されていくという積極的意味を認めているように思われる。しかし商品経済の持つ意義についてマルクス主義経済学的に言うと、商品とは「価値」と「使用価値」との統一であり、むしろ「価値」が主導的なものである。そのため商品経済あるいは市場経済では、この主導的とされた「価値」が無限に追求される傾向がある。ところで報告では、ペー族においては自分自身の生活に根ざす文化を区別して保持しているとしている。このような自分自身に根ざす文化というのは商品経済のいわば「使用価値」的側面であり、商品経済化の進展の下では、その比重を落としていき、他方の「価値」という無差別な側面が比重を増大させていくのではないかと考えられる。平たく言えば、金儲け一般が主になり、民族文化を保持・再構築する側面が希薄になっていくのではないかという問題である。

アルチュノフ報告に対して

我々は高地コーカサスについては、アルチュノフ先生も触れられたが、トルストイやレーンモントフの作品の中に出てくる地域であるということぐらいしか知らず、もっともこれは私の不勉強のためかもしれないが、またトルストイがロシアによるコーカサスの併合を激しく批判したと聞いている。しかしこれは約150年前のことである。ところで現在、同地域のチェチェン等での軍事的衝突と独立の動きが盛んに報道されている。しかし報道では高地コーカサスの社会経済状況についてほとんど触れておらず、民族的対立や軍事抗争の原因や基盤は何かということが分からない状況にある。そうした状況下での本報告は、我々に非常に多くのことを教えてくれた意義深いものである。そこで

私は報告の趣旨をより正確に理解するために、時間も少ないので、以下の簡単で基本的な3つの質問を行うことでコメントに替えさせて頂く。

高地コーカサス少数民族の民族的結合の状況

第1の問題は、色々な理由によって少数民族の民族的結合が全体として強まっている、地域によって違うようだがそれが自治権拡大の基盤となっている、そしてチェチェンでのいわゆる独立運動の基盤となっている、もちろんチェチェンの場合には特殊な例かも知れないが、このように全体の流れを、原因はどうであれ、従来隠されていた民族とされている高地コーカサスの少数民族の民族的結合が流れとしては強まっていると考えて良いのかどうかという点である。

民族的結合に果たす民族文化の役割

第2に、民族的結合の基盤に関して、今回のシンポジウムのテーマである「民族の文化」の果たす役割についてである。報告ではイスラム信仰に触れていたが、信仰や言語が民族的結合の強化に果たす役割は具体的にどの様なものであるのかという問題である。

民営化及び観光産業の発展の影響

第3に、民営化及びその中で観光産業についてである。報告では民営化の進展について、これは非常にジグザグなものだろうし困難であるだろうが、観光産業がその一つの道ではないかと言われた。観光産業も含めた民営化による市場経済的発展が、民族的アイデンティティを強化したり少数民族の民族的結合を強化する方向をもたらすのかどうかという問題である。これは実は中国の少数民族を取り上げた横山報告に対する私の疑問と同趣旨のものである。

注

- 1) 私個人のことに触れて申し訳ないが、私は横山先生が調査のため長期滞在されていたその大理の地で1985年春節に初めてお目にかかったことがある。私はその時には絞り藍染め布をかなり沢山買った覚えがあるので、報告で取り上げられた絞り藍染め産業の発展に若干寄与したのではないかと思われる(もちろん冗談だが)。

参考文献

塚田誠之

- 2001 「チワン族の『三月三歌節』にみられる文化変容とその背景」佐々木信章編『現代中国の民族と経済』世界思想社。